今回浜野様は「花隈」なる記念誌を発行されるに当り私に何か一寸書くようとのおすすめであったが、世間並みの学校や学問もできなかった逆境の生い立ちでしたが、人間の真の志は計らずも霊魂はかかる光栄の機会を与えて下さったのであろうか、私は生存中この度の御申し入れを人生中の満足とし、喜ばしいのである。

合掌再拝

（昭和四十五年六月一日記）

花隈城天主閣之趾

記念碑建立

市営駐車場と花隈公園として復活？した「花隈城」の天主閣のあった処が歴史家の調査で花隈町内の浄土宗福徳寺境内ということが立証されたので、之を後世に伝えるため記念の碑を建立しようと福田とよさん（旧城主荒木志摩守安志の第二十代八十七才）と花隈町自治会、新興会の会長浜野吉男氏が話し合いを進め、福徳寺住職酒井立順師も場所提供を快諾され、同寺山門わきに建立されたのである。

昭和四十四年七月十二日この除幕式が行なわれ、施主に福田とよさん、浜野吉男氏、後援神戸市教育委員会、神戸史談会、関係者、地元民多数出席、福田とよさんの孫杉山たまきちゃんの手で除幕された。

高さ約一・五メートルの白御影石に「史蹟花隈城天主閣の趾」と刻まれ、この刻まれた文字は旧城主の子孫福田とよさんが書かれたものである。

これで花隈に新しい史蹟としての名所がふえたわけである。碑の建った福徳寺の境内には花隈城跡から発掘された無縁仏の石塔が二五〇安置されている。同寺には花隈城の古瓦（唐草模様一片）も保存されている。

花隈城跡発掘瓦類　福徳寺所蔵

花隈城跡から出土した石塔るい

川辺賢武

現在の花隈町でも元町でも、中世に関する物的資料は何もない。その点花隈城跡から先年発見された石塔類が唯一のものであるから、この機会に書きとめておいて、後の世の参考にしたい。

昭和二十六年十一月のこと、花隈町の花隈城跡で、某料亭の建築中に一ヵ所から沢山の五輪塔その他の残欠が出て来たのでその直後調べたところ、宝篋印塔や五輪塔の基壇部三四、それらの基礎部三、宝篋印塔の塔身一、五輪塔の地輪部三九、一石作りの五輪塔残欠やその他八、合計八十五個であった。

それで気のつくことは、どれも方形のものばかりで球形の五輪塔の水輪・風輪・空輪や三角形をした火輪部や宝篋印塔の笠部がまったくないことである。

発見された同工事現場を見ると、円形の井戸と思われる直径一二一センチ、深さ二四二センチほどの底へ方形の石塔類の一部を敷き詰め、周囲には同じく方形の平らの面を表にして積み上げてあったらしい。井戸でなければ水溜めであろう。それだから球形や三角形の積みにくいものは使用されなかったのである。

ところが今から七、八年前、元町本通りの四丁目から五丁目にかけて、水道工事のために掘り返していた時に方形のものはなく、球形や三角のものばかりが、ごろごろ出たことがあった。それらは花隈から出たものと合わすと恐らくセットになるものがいくつかあったと考えられた。

それで思われることは、今から四百年ほど以前の天文・永禄のころには、現在の元町通りの繁華街は、田園の中の共同墓地であったことがわかる。当時墓を作った人達はおもに花隈方面の部落の人達であったと思われる。

天正八年（一五八〇年）花隈城が落城ののち、その跡を花隈村の農家が田畑として拓き、用水の井戸や水

溜めなどを作った。その頃すでに無縁となっていた基石のうち、使用できるものを持ち運んだに違いない。それは墓の年号よりはるかのちで、江戸時代の中頃であろう。いかに無暴な者でも、まだお参りをしている墓を壊して取り去るはずがないから築城の際に作った井戸とは考えられない。

こう見ると出土したこれらの石塔類は、花隈や元町の変遷を知るうえの資料である。花隈や元町の歴史資料でも、この石塔類の年代より古いものは何もないことから注意さるべきものである。花隈城跡から出たものは現在花隈町の福徳寺の無縁墓に積まれてある。元町から出たものは町内の人達が集まって、ていねいに供養したうえどこかへ移された。

明治三十四年、花隈城跡に兵庫港務部があった頃、時報球の建設のとき、地下から五輪塔の一部を掘り出したことがある。そのとき人達は、これは花隈城で討ち死にした人の墓だと決めてしまったが、こんどの石塔類の年号から見ると、これらは城のできるより以前のものであることがよくわかる。

花隈からの中、五輪塔や一石五輪塔の地輪部類はいずれもだいたい高さ二一センチ、横幅二七センチ、四方の梵字の下一字だけを皆残している。

銘文の判明するものを挙げると次のよう。

為道円禅門 「アン」　逆修 天文四年己未二月十八日	月仙宗円禅定門 「アク」 永禄十年七月廿二日
為宗椿禅門 「アン」　逆修 天文八年己亥	永禄十年 「アク」宗柏禅定門 十月十日
為宗国禅門 「アン」　逆修 天文廿二彼岸日	道吉禅門 「アー」 八月時正
為妙弥禅尼 「アン」　逆修 天文廿二彼岸日	宗　本 「アン」

中央「」内は梵字、「時正」は彼岸の中日のこと、逆修というのは生前にあらかじめ死後の往生菩提のために仏事を修することで預修ともいう。

（神戸市史編集委員）

史 ① 花隈

福徳寺住職　酒井立順

「はなくま」とは会下山人の史蹟講演集によると「山のくまりの鼻であって海陸の間の狭さというものは非常なもので、地図の上から見ると此処を通らなかったならば非常に迂回で六甲の裏を通らなければならないのであります」との意味からであると。これは古代神戸の発掘から考えると県立神戸高校から脇浜の線へ、さらに省線元町駅山側に一線を画する考えから主張されたのであろうと思われる。それは戦後間もなく花隈台の西側より古土器が発見されたことよりも考えられる。すると或いは敏馬神社も古墳であったことが想像される。

近年花隈城趾を中心に石の五輪塔の多数発掘も無縁墓石と考えてよい。

この線が古代海岸の線で、この線より南部は山よりの流出堆積造地である。花隈の現地もこれに属し寺の西側は川であって、そは千鳥屋（現料亭）の西側の積み方によって証明される。蓋し私考するに「くま」とは海岸線に屈していることで「山くまり」でなく海岸線のくまりにて外より一般に通称された名称であろうと思う。

徳川末、明治初年の花熊村の図によると花熊村は、東方は四宮神社（キモン）に当るを中心に山手小学校並にトーアロードの前方にまで及び、そして神戸村に接し、南方は省線、北部は再度町を含み中宮村に接し宇治野山を除く、地中に武徳殿跡、相楽園、中宮小学校跡は池であった。

とにかく要するに明治初年に下山手六丁目、花熊村が合併した事実があるが、逆に下山手六丁目は花熊村の分立であったのである。就中再度筋が花熊村であったことは、花熊城の戦争中は村全体がこの地へ移転したことがある。よって花熊地下の家は元屋敷の再度筋に土地を所有している事実によってわかる。

今の南京寺関帝廟の地は花熊の地域に属した。よって村の松本亀太郎家が寺の隣にあったが、そは花熊の地だったから、その地へ家屋が創建されたのである。時代堅気から考える旧花熊村の人々は市電六丁目筋より下へお茶屋を建

てさせた。そして一方では風紀上の取締りが簡単にできるようにしたのである。また大東亜戦争終結までには、市電線路より上には一軒もなかったのである。

勿論この時代には川の流れが今とは変っている。武徳殿跡は池で、そは四宮神社の西側を通り、再度川は今の花隈の中央と、また上流で分れて八丁目を通り流れている。（現今のモダン寺の横を通っていた）よって降雨の折はそれを走水（はしうど）と呼んだ。この八丁目通りは川を道路としたからで今でも降雨の時は道路上を水が流れる。その川の跡は隈病院東方の大通りの東側の溝が最も原型を残している。

さて現今の花隈は一体いつ頃から現代花隈の相をなしたのか、こは明治も二十年代に属する。花柳界は、もと兵庫柳原の分れで、そは今の三越の北小路から起き花隈の地を定めたもので元町通りから上った。

その頃を古老は狸が大通りに出てその地一体は竹藪だったと伝えている。

元神戸幼稚園西側の坂を一名御幸坂とか、或いは狸坂とか古老は呼ぶ。また今の花隈の本通りを古くは地獄坂と言っていた。（未完）

② 花隈古今物語

明治初年と茶並に線香について少々記すことにするが、私がかく云うと、芸者のことなら知っているが、そんなことがあったかと云うであろうが、神戸開港はその最初は花くまの茶輸出と玉ねぎに始まった。

大路安兵衛に大阪灘関線香仲間申合帳が保存されている。文久二年、元治元年、慶応四年双栄講の仲間人別表等によると、互いに差入申約定一札の事の一項があり、証札元治元年の記事がある。会員は互いに講金で融通していた。

線香の資本主と稼人とで労働者の争いが訴証にまで発展した大事件があった。詳細は略するが関係人のみを挙げると、

摂州八部郡線香屋仲間

兵庫津大行司　松屋五郎右衛門

花熊村大行司　源兵衛

兵庫津神明町　油屋庄兵衛
〃　東出町　今津屋富五郎
〃　西出町　天野屋ひで　支配源七
〃　佐比江新地　荒物屋儀三郎
〃　小物屋町　布屋又七郎
〃　石井町　忠右衛門
烏原村　小度所
中宮村支配　利三郎
花熊村　幸右衛門　安兵衛
喜三衛門　卯兵衛
市兵衛　弥兵衛
松五郎
二ッ茶屋村　茶屋栄太郎
〃　樽屋彦太郎
下谷上村　万右衛門
原野村　嘉太夫
〃　中村権右衛門
東下村　平兵衛

の名が見える。後仲介者が入り無事終る。

その原料製造所は再度谷の水車場であった。よって現在の谷に水車あとがあるのに気付くであろう。現在八丁目の今井線香屋はその遺店である。

また茶はアメリカ貿易で茶の葉の中に柳の葉を交えたによって川柳の名称はわが花くまよりか……。この事実が表面化して茶の輸出は大阪堺港に移る。蓋し、どうして輸出の事を考えたのか、恐らく現在の救済会病院前の碑にある「彦」の手引であろうと考える。

芸妓店はもと柳原方面のが三越北側に、そして当時空地のあった花くまに移入したのに始まる。よって当時の地主は明治の始めに元の市電筋（山手線）南に定めたという。下山手六丁目は明治九年「花くま」より分離する。

かつて故大慈五郎右衛門氏の話に只今の魚善の道路を拡張するに坪（三・三㎡）五銭五厘で買上げたとの事である。

そして、その道路の南側は城の濠があったと古老より聞く。また今の芝原宅の南西角は濠で、道に面した処にさらし首の台があったとか、従ってこの道を地獄坂と人は呼んでいた。この道は花くまの東西に通じた道であった。

もと市の幼稚園（現在花隈駅西口東側附近）の横より上る道路が今も影うすう通じている。狸坂と通名、また一に

みゆき坂ともいう。ここは迷路式に出来ていて、恐らくは元の城の道であろう。終戦当時に足利時代の灯籠のかけらが土に埋もれていたのが発見された。これを考えると安徳天皇行幸道ではなかったかと思われる。

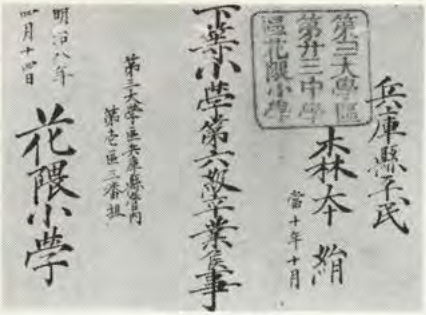
現在の中央の大通りは川だったのである。あの石垣に充分遺影がある。弘法大師もこのみゆき坂より再度山へ登られたのかも知れぬ。

今道路がなくなったが魚善の西の南北の道路が狸坂に通じたか、すると狸坂（みゆき坂）は平安朝からの影が残っていることになる。

③ 昔花隈に小学校あり

明治五年八月三日学制と共に明治十六年まで市中に公定小学校は計十五校に及んだ。

花隈小学校の史料については福徳寺古文書（神戸大学図書館蔵）によると「明治六年四月より七年八月まで八十五円、小学校宿泊料とある」また卒業証書は上図のようになっている。



当時の卒業証書

これによると教師は松田祐氏、場所は今の神戸協会いずみ幼稚園の南側花隈町一八番地であった。

上図の証書の「当十年十月」の文字に注意してほしい。普通は数え歳が行われていた時代にもかかわらず満何歳との数え方であり、全くの西洋式であることに気付くと思う。

この証書は花隈町一一八番地在住の小西家のものだった。この花隈小学校は下山手小学校（当時）を合せて明治十一年に現在の神戸小学校になったのである。

花隈花柳界誕生記

荒尾親成

慶応三年神戸に居留地が作られることになったとき、その当時は神戸より兵庫地区（現在の島上町附近）の方に有力者が多く、毛唐と同居するのは身の汚れと、川を三つへだてた東の方へ持って行くよう力説した。当時の県庁も兵庫にあつた関係上、役人もその言を聞き入れ、兵庫から数えて湊川（昔は現在の新開地本通りを川崎造船所へ流れていた）宇治川、鯉川（現在鯉川筋となって残っている）の三つを渡った海岸に居留地を作ったのである。ご存知の通り元オリエンタルホテル、水上警察署周辺である。

当時の外人は清国人（現在の中共、国府）と同居するのを拒んだため、清国人は鯉川と宇治川の間の海岸に居を構えたのである。

清国人を川三つへだてた処へと強制せなかったのも同じ東洋人という気持が働いたのではないかと思う。

清国人はなかなか商売が上手でドンドン店をひろげ盛大になって来た（現在の南京町は当時の清国人の市場であった処である）と云って異郷の空であり、妻子を呼ぶこともできず、日本妻を娶り花隈の地に家屋敷、別邸を作って囲っていた。その内県庁が現在の旧館の処へ移転され、当時の権力というか、お役人の遊ぶ所がなく困っていたのに目をつけ、大きな家屋敷を改修して料理屋、席貸を営むものが出て来て逐次大きくなり、最盛期には料亭、席貸百五十軒、芸妓五百名という神戸一の花柳界となったわけである。初代知事伊藤博文や桂公爵と花隈の逸話は今もたくさん残っている。

それでは花街誕生にからんだ花隈夜話を書いてみよう。

花隈花街の誕生は明治初年清国人貿易商がお妾さんを多くここに置いて粋な町づくりをはじめたことに由来したと説く古老がいた。この人惜しくも数年前故人となって終ったが。

神戸開港（慶応三年十二月七日）当初の外人居留地は、鯉川筋と宇治川の間に制約された、いわゆる華僑と呼ばれる人々の間から不満の声が出て、これに欧米人も同情、翌慶応四年三月陳情と外交交渉によってこの西の区域を宇治川筋（今の三越の処）まで拡張することに成功。こんどは待ってましたとばかり華僑の人々がここに商社を設け清国人特有の木造ペンキ塗の異人館を建て並べたばかりでなく、この居留地の東の一角、すなわち元町一丁目南裏には南京町（ナンキンマチ）と呼ばれるマーケットも作られ異国情緒たっぷりな神戸新名所が出来上った。

やがて明治十年西郷隆盛の西南戦争が起り、神戸が官軍の輸送基地となるに及んで市況は俄に活気づき、のちに三菱を作った岩崎弥太郎、長州出身の光村弥兵衛等の政商が当時の船成金になり、これとともにこの戦前戦後を通じて商売上手の彼等華僑のふところ具合は日に月にふくらんでいったようである。

人間、殊に男性の弱さはすこし金ができ、自由に使えるようにな

◁慶応四年区画整理のできた神戸村

ると安来節の文句ではないが、止めて止まらぬものが酒とバクチと色の道である。

殊に正妻や家族を遠く祖国に残して出稼ぎに来た彼等華僑男性には必然性として第二夫人、第三夫人を蓄えて旅愁を慰め、且つ成功を心から喜ぶというケースが多く、素人女性や南京娘もよいが、できれば粋を誇る日本女性をと物色しているときあたかもよし、新開港場の新天地を求め、ひと旗揚げようとの意気込みで神戸へ乗り込んで来た東京、京都、大阪をはじめ各地花柳界出身の女性もまた多かったようである。

そして運よく手活けの花としてこれを眺め得ることに成功した人々は期せずしてこの居留地に近く南京町にも便利な、ここ花隈城趾附近はまたとない好条件に恵まれた土地として喜ばれた。

明治二十年前後の花隈は、現在残されているその当時の地図で見てもわかる通り、まだ田畑が多く、それも段々畑で雲雀やホトトギスの鳴く土地で、これらの人々の手で極めていき好みで、瀟洒な愛の巣が次々と建てられ、ときには「二号サン」自慢の鼻下長旦那が友人を集めての宴会やパーテーが催され、中には商談の場、社交の場としてこれらの家が利用されるケースもまたふえていったようである。

ところが好事魔多しで明治二十三年五月、花隈一九四番地中西某の家から出た失火による火災は延焼三十余戸に及び、花隈の大半を焼いてこの町に大きな打撃を与え、また明治二十四、五年となって日本と清国の国交が怪しくなり、やがて二十七、八年の日清戦争になると有力華僑の引揚げ者は続出〃。これらの「二号サン」達の中には敵国人によしみを通じた売国奴的行為として甚だしく侮辱を受

けた人々もまた出現した。

不幸にして旦那を失った人々、或いは私は「天晴れ大和撫子ですよ」と自活の道を雄々しく求めた女性達によって忽ちのうちに狭斜の巷は復興され、何軒かの待合いや料理屋さんが営まれ、また日清戦争ののち活気を取り戻した花隈は一層活発に発展の一途をたどってきたのである。

しかし東京新橋と並んで極めて品格のある格調高い花隈芸者町を育てあげた功労者は果して誰であったのであろうか。殊に大正時代第一次欧州大戦後の好景気を反映しての花隈はそれこそ歴史に残る全盛時代であった。

三井・三菱・住友・川崎・鈴木の財閥をはじめ勝田・岡崎・山下・内田等の船成金、さては政界の大物旦那に育てられ内至は影響を受けて名妓よ⁉　女傑よ⁉　と噂に高い人々も多く輩出しているのである。

このほど「万国博」に来た東京のある老粋人は神戸高速鉄道花隈駅の花隈の呼び名を聞いて「ウワー荒尾さん、懐しい名やなァ、いっぺん降りて古戦場を尋ねてみようよ」と一夕ご馳走に預ったりした。

ひときわアカぬけのした瀟洒な店構え、一流の床飾り、日本風の風雅なお座敷⁉　日本髪の花隈名妓⁉　洗練された至芸⁉　神戸の無形文化財としてますます保存・発展させたいものである。

明治の伊藤博文をはじめ花隈に遊んだ名士は多い。従って残された粋な美談や秘話のたぐいも尠くないのだが、お行儀がよく、他人の俗事や陰口をうっかりしゃべらないようにと厳重にしつけられているこの里の芸者さん、老妓たちは、噂さ話さえしないことに誇りを感じているように見受けられる。一席設けていてたまたま隣り座敷にごく親しい親友の顔が見えても「別席のお客さんにはヘンに言葉をかけてはいけないのですヨ。この里のエチケットに違反しますからネ」と、ある老妓は私に教えてくれたものである。

×　×　×

私は有難いことに妙なご縁があって終戦直後からパージにかかって無聊を持てあましていた当時の元大蔵大臣の津島寿一先生、元兵庫県知事（昭和十、十一年）元内務大臣をしておられた湯沢三千男先生に大変かわいがって頂き、よく花隈でご馳走に預り、ときには有馬にさえお供することもあった。

津島先生はヤング津島と呼ばれ、外交官時代英国花柳界？　オット失礼、社交界に名の聞こえた粋人中の粋人⁉　一方湯沢先生も多趣味で知られ「宮城マリ子後援会長」を買って出るといったオツなお方、私にもチョットそんな小型の趣味があるので同病相憐れむと云ったことでお見知りを頂いたのか、津島先生には故郷の高松坂出へ、また湯沢先生には東京へ招いて頂いてご愛蔵の美術品を見せられ、私なりの意見を求められたりしたこともあった。

花隈・有馬でのお二人の席と年、月は別々のものであったが、津島先生は「長駒さん」「歌丸さん」「てる香さん」等がごひいきであり、湯沢先生は「歌栄さん」「政菊さん」「八重菊さん」「千代栄さん」がお気に入りで、とりわけ八重菊さんの艶姿と聰明さには大変な興味を持って後援され、これらの人々で「在郷美人会」に籍を移されたのちのちまでも神戸に来ると必ず一席設けられることを常とされていた。

「キミイッ⁉　花隈の姐さんの一流品になるとそんじょ、そこい

らの三等重役と違って人を見る目を備えているからね⁉　もう一つエライ奴になると声を聞いただけで人間の上等と下等品がワカルとヌカシおるわい⁉　ワッハッハッ」…いつもこんな調子であったがお二人とも酔えば必ず立ち上がって愉快に踊りを踊るのが共通していた。

その湯浅三千男先生がこれは君、ワシの絶筆になるかも知れんよと署贈して下さった随筆「天井を蹴る」を見ると意外や意外、神戸市長として名声赫々たりし鹿島房次郎氏（四代目神戸市長、大正九年まで十年間在職、昭和七年七月二十九日歿六十三才）の艶聞⁉花隈情話を活字にされているではないか。転載させて頂こう。

「粋人市長のあと追い心中をした名妓」

神戸の花隈に名妓とはいえないが歌代（うたよ）という志の立派な妓がいた。歌代の旦那は市長の鹿島氏。歌代はある時、鹿島君に対し自分は一度お嫁に行きたいと思っていたが、ころ合いの人を見つけたので嫁にやらして貰いたいと云った。鹿島君は太っ腹の人だったとみえ、「よし、それなら俺が親代りになってやる」と云って箪笥、長持、その他調度を立派に揃えてやった。嫁に行ったのは大工か何かの職人であったそうだが、その姑にいじめられて大変苦しんだ。二年そこそこで離縁になったので、また鹿島氏に旦那になって貰いたいと頼んだ。随分虫のよい話である⁉　しかし鹿島氏はまたヨショシと引受けた。そして、それから何年か経って鹿島氏が死んでしまった。（注前述）

すると歌代は、それから髪のものや衣類などをドンドン知り合いの者に呉れてしまう。姐の歌栄は心配して旦那が死んだからと云って、何のためか知らないがそう品物を人にやっては、これからの二度のつとめで芸妓に出る時困るから気をつけたらどうかと注意したそうだ。

ところが七、七、四十九日の日、亡き旦那の跡を弔うてから仏壇に写真を飾り、薬を呑んだ上に膝（ひざ）を縛って乱れないように剃刀（かみそり）で咽喉を切って立派に自殺してしまった。

彼女は鹿島氏死亡の時から既に死を覚悟していたのだった。あと始末をして四十九日目に死ぬなどと云うことは一時の興奮や何かではない。つくづくと亡き旦那の広い心と深い愛に今更ながらしみじみと打たれ、最早や生きている甲斐のないものと思いつめたに違いない。嫁に行ってみて彼女は初めて人生を知ったのであろう⁉

私は彼女を知らない。私が神戸に行った時、彼女は既に亡き人の数に入っていた。彼女の姐歌栄さんやその他の人から歌代の話を聞いて深く感激した。縁あって旦那となるならば鹿島氏の如く広い心と深い愛を持ち、また縁あって女となるなら歌代の如く強い愛と深い心を持ちたいものである。

花隈で遊んだら……

神戸の花隈といえば東京の赤坂、柳橋、京都の祇園などと同じように上品なたたずまいを見せたお茶屋街。

人通りの少ない露地にひっそりと建っている狐格子の桟に時々人影がさす、柔かい軒灯。しっとりと打ち水された叩きに盛り塩がかすかに崩れる。

花隈の夕景には、まだある意味で古きよき時代のコウベの面影がある。

兵庫県庁の西側筋一つへだてた南の丘、正確には花隈町と呼ばれる港の夜景が美しいこの一角は、たしかに神戸と盛衰をともにして来た。

明治初年中央政府から派遣されて来た伊藤博文ら少壮官僚たちの郷愁にこたえて生れ、華やかだった第一次大戦後の船成金たちの手で支えられた。

当時芸者の数は五〇〇人を越えたといわれ、数々の船成金たちのご大尽遊びの逸話が今なお語り伝えられている。

現在お茶屋の数はざっと四十軒、芸者は約一〇〇人、昔のような派手なお茶屋遊びはしのぶべくもないが、時代にふさわしい生き方とプライドで夜の街を形づくっているといえる。

料亭で料理を誇る「花緑」「阿らい」「魚善」応挙の軸を集めているので有名なある料亭、関取出羽錦夫人の実家、将棋名人戦もよくこの一角で行なわれている。

さて、ドライにいっていくらで遊べるかということだが、この計算がなかなかむつかしい。私たちの出かけた店は三十人からの宴会を断って静宴を楽しむように気をつけてくれた。万事金次第の当今では表彰ものの気っぷである。

この気っぷでお客を遇するから計算がしにくい。標準からいえば料理一人前千五百円から三千円、芸妓の花代が六時から九時まで四千円強（このところ芸妓の数が少ないので予約せねばならない）あとは一時間毎に五百円と少々ということになっているが、この価格プラス気っぷが遊びの値段となる。まず料亭に打ち割って相談するのが一番間違いないといえそうだ。（昭和四十年ガイド神戸誌）

× × ×

では現在はいかほどで?

（昭和四十六年一月現在）

一席　十八時から二十一時まで約六千円、あとは一時間毎に千百円強、芸妓さんの数も六十人足らずになっていると、料亭「長駒」の主人今井良三氏談。

日本最初の活動写真

花隈で興行

日本で一番最初に活動写真を公開、入場料をとって興行したのは花隈の東北端にあった神港倶楽部で興行主は神戸駅近くの相生町で銃砲店を営んでいた高橋信治氏（大正四年六十四才歿）、時は今から七十余年昔の明治二十九年十一月二十五日の事である。

当時の記録では

十一月二十五日　西洋人スペンサー銃を以て射撃の図

〃　二十六日　西洋人縄使いわけの図

〃　二十七日　西洋人旅館でトランプの図

等が上映されたとある。当時はキネト・スコープと呼ばれ、フイルムもタスキと名付けられていた一連の輪になっていたもので、同じ場面がグルグルと何回も連続して映る至極幼稚なものであったが、とにかく写真が動くということが珍らしかったようである。

このエジソン発明の活動写真は外人居留地リネル商会と高橋信治氏によって輸入され、いち早く当時の知事（周布知事）の斡旋で十一月十七日諏訪山の「常盤花壇」にご滞在の小松宮殿下のご覧に供し続いて二十日には舞子の別荘を持っておられた有栖川宮様にもお目にかけ二十五日一般公開の運びとなったと、当時の「又新日報」は報じている。

そして、このキネト・スコープは当時の神戸の一新聞記者が、動く写真だから活動写真とごく自然に不用意に生れた言葉が名付け親となって、活動写真と名付けられ一般大衆に親しまれていったようだが、明治三十年一月には大阪の南地演舞場、続いて東京浅草の花屋敷、上野公園と公開され、日増しに人気を呼んで今日の映画の隆昌のもととなったわけだが。

その誇るべき草わけは、わが花隈の神港倶楽部で、神港倶楽部は当時のインテリ紳商や文化人等の発起で明治二十四年一月建設された建物で、株主には伊藤博文、武岡豊太、村野山人、竹馬準三郎等の名士を網羅して当時の神戸文化の一大殿堂であったわけである。

ところで明治三十一年になってこの活動写真の撮影機を輸入してやろうと、どえらい意気込みでこれに成功した人がこれまた花隈の隣保、北長狭通五丁目に住んでいた光村利藻氏（この人の家はのちに料亭菊水となる）

光村利藻氏は長州出身の政商、光村弥兵衛の長男、大変な粋人で大阪富田家の豆千代（八千代の姉妹芸妓）を落籍して、東京の蕩児新橋のぽんたを落籍、最近テレビにもなった鹿島屋清兵衛と東西遊蕩児の双璧と花柳界に騒がれた人である。

しかし二人ともわが国の写真、出版技術を開発した功績者でもあったわけで、光村氏はこの撮影機を使って明治三十一年、九代目団十郎の「関の扉」や「紅葉狩」の撮影に成功し、そのフイルムを今日に残し映画史上に貢献しているのである。

（荒尾親成）

蘇生花隈城の春の色

この座談会は、三宮センター街のPR誌、月刊「センター」（昭和四十四年三月、第一七〇号）に掲載されたもので、同誌の快いご諒解を得て転載したものであります。

花隈城の駐車場完成も間近く、城趾の容相も整いましたので、花にさきがけて花隈のいろいろを語ってもらいました。

今回の特別ゲスト長駒姐さんは、花隈の生き字引き、日本一最高齢の現役芸者で八十三才。八十五才と自称しておられますが、お声が美しく、若々しく三十才はお若く見えます。花隈は〝若返り〟の妙薬でも売っているのでしょうかね。

〔ご出席・発言順〕

雑誌センター編集顧問　行政猛男さん

神戸市史編集委員　川辺賢武さん

幕末研究家　荒尾親成さん

長駒（ちょうこま）姐さんこと　今井きみさん

司会・本地すま子

▽幻の城「花隈城」

行政　今ちょっとお城を回って見ましたら石垣を築いたり、大砲を据えたり、公園に駐車場を併用されるもくろみは結構ですな。

――花隈城壁にお城のいわれを書いて、はめこまれておりますが、有名な割りに薄命な城だったのですね。

川辺　あの原稿は僕が書いたのやけれども城が出来たのは今から四百二年前、永禄十年と記録に出ているが僕はも少し後やと思うけどね。

荒尾　天正八年二月池田信輝らに攻められ七月二日に亡ぼされた。十三年間あったこ

とになっているね。

伊丹の有岡城が本拠でここは出城やね。今のお城の出来てる所は川辺さん、二の丸ですね。

川辺賢武さん、長駒さん、荒尾親成さん、行政猛男さん

川辺 本丸の福徳寺、その東に一の丸、二の丸…

——落ちた後はどうなったのですか。

川辺 城をこわした材料で兵庫城が出来た。今の築島の辺りね。池田信輝が落した褒美にもろたんです。その跡は何も残らなかった。花隈村が田圃にしてしもて、石垣などが残っただけ。石垣も持ち出してるし、元どんな城だったか知る方法はないんです。神戸大学の先生に調査してもらったけど、結局わからんね。櫓でも建てたい、という人もあるんやけど僕は反対やった。どんな建物やったか、誰も知らへん。

——城の名のみが有名で、結局幻の城「花隈城」なんですね。

では今度はグッと人間臭く、花の香漂う色町「花隈」のお話をお願いします。

▽花隈色町の発生は…

行政 長駒さんお元気で結構ですなア。何年お生まれです。

長駒 明治十八年ですから八十三、数えで八十五ですわ。

荒尾 日本一の現役芸者さんで縁起がエエですナ。終戦直後から知ってますが、今も一つも変られません。

——ではこの城跡にどうして色っぽい町が出来たのでしょうか。

荒尾 私が聞いたところでは、神戸の居留地が慶応三年十二月に四万坪出来た。それが狭いと言い出して四年三月英、仏、和三国の公使が、朝廷に参朝して広げてほしいと申し立てた。そんなら広げましょうか、ということになって鯉川筋から宇治川まで広げた。そこへは中国人、当時清国人がはいって来た。清国人は非常に儲けて、明治十年西南の役には神戸が兵隊の輸送基地になったりして取引が盛んになった時、儲けた清国人がええ人を囲うてその置場がこの花隈地帯、空地があったのでそこへ住まわせた。二号さんの中には遊芸にいそしむ人もいるしで、明治二十年頃から花隈が色町として繁昌してきたと聞いています。

川辺 一番始め聞いた言うたらおかしいけれども、その通りです。

荒尾 日清戦争で日本に負けるまでは、支那は一等国やからな。

長駒 私ら花隈へ抱えられる時、支那人と異人さん、西洋人ばっかりや言うんでしょ。

でそんな所へやられへん言うて、おばあさん、お母さんがついて来ましたんでっせ。十六で出ましてん。

川辺　東京から来てやったん？

長駒　いえ、近江の八幡さんのところです。十五年勤めて三十で芸者止めましてね。東京へ行って二十五年止めてました。そしてまた帰ってきて、やっぱりこの商売がよろしいもんですさかい、五十五でまた出ましたんです。

川辺　一年何ぼやった？安かったと聞いたんやが。

◁荒尾親成さん

◁長駒さん

長駒　花隈は一年百円でした。その時分五年半で百五十円でした。年金（ねんがね）言うと高いんでっせ。

荒尾　最初出られたのは日露戦争のちょっと前ですな。当時支那人が…。

長駒　ええもう仰山いはりました。呉錦堂はんですか、十二番さん…番号で呼んでました。十一人程お妾さんズーッと置いて…。その中に日本人が一人いはりましたけどね。

荒尾　舞子の六角堂、移情閣主人。

長駒　その他に三十五番さんもお盛んでした別びんさんでね、正月の花の売上げで一、二取ってはった福竜とかいう人でしたが、支那人のお妾さんになられた。そりゃもう、えらいこっですねん。

川辺　看板には梅幸がよう出てた。

長駒　梅幸さんは踊は一番でした。梅丸いうてこの人も上手でした。

川辺　背も高かったね。あんたより高いですか。

長駒　いえ、私が一番高い、よう言われてました。

▽花隈に遊ぶお歴々

川辺　梅竜（うめりょう）さん言うていましたか。

長駒　梅竜さん、おました。

川辺　外人は梅竜さんのことをメリーさんと呼んでましたなア。

荒尾　長駒さんも日露戦争の好景気から大正七、八年まで、絶頂の売れっ子やったようだけれども、いつか永さん（六輔）とのテレビでも言ったんだけども、伊藤博文、西園寺公とか、偉い人の座にはずいぶん可愛いがられて出られたそうで。

長駒　アハハ、桂太郎さんね。その頃、伊藤さんは西常盤や常盤花壇、西園寺公は西常盤でしたね。東京からお連れになりますからね新開地の音羽花壇は宮さんでした。常盤花壇に伊藤さんの掛軸や何かありましたね。大きなものもおました。

荒尾　その一部が売りに出て、私も一つ買いました。

明治六年県庁がここに移ってきてるでしょう。伊藤さんも知事になって来ておられたし清国人もそういう風だし、条件がよかったんですな。

長駒　それでも支那人（外人）に出る芸者と日本人に出る芸者とは別になっておりました。

▽西園寺公の「鮎」騒動

荒尾　花隈で遊んだ財界面々のエピソードもさることながら、西園寺公の鮎の話いうの聞かせて下さい。

▷川辺賢武さん

▷行政猛男さん

川辺　長駒さんと長いノンよう似てるナ。（顔が）

長駒　ハハハ、長いでしょう。私が二十六ぐらいですナ。ちょっと長駒かって綺麗な時分、よう可愛いがって頂きましたンです。

その時は西常盤でした。住友さんや山下さん吉左衛門さんやら大勢並んでいなはるところでした。お膳ズーッと出ましてね。その時六兵衛さんいう姐さん芸者さんが酔うてはいってきて、ご前がその鮎食べかけなはったところへ「あ、ご前、それはこれおかけなったらよろしい」言うてタテズをザーッとかけはったんだ。そのあがってるとこえね。そしたら

「無礼な、下がれ――ッ」

とおっしゃった。みんな縮み上って下向いてだまってますのやわ。

ご前おかけやす…親切にしはったことがちょっと失礼でしたんやろ。箸ぼーんと置きはりまして…私その前にいまして「下ゲーッ」とおっしゃった。その芸者にさがれーッ（笑）姐さんはね、ハーッと伏して芝居みたいだった。「下がれ！下がれ！」もうそやみんな水打ったようになりました。お膳が出てまだ間がないでしょう。お酒もまだまわっていません。――ヤボなこと言うたと後でおっしゃいましたけどね。あれが若い芸者やったら許す、相当年いってるのに、人が食べかけてるところへ、付けるも付けんも、まだ考えておらんのに、そういう作法は何ごとだ…。吉左衛門さんもみんなかがまりはったん…そこを私が…ようお酒飲む時分で二十六ぐらいから私はアル中ですねん。一升五合ずっと飲んでました

川辺　ホー、まだちょっと早いがね。

長駒　早いですねン。そしたら西園寺公もアル中ですねん。そして長駒一杯飲め、お酌せえ、とおっしゃった。恐いのとアル中と両方で、お酒つぐんですけどね。ご前もふるえはる。盃と徳利が当ってチョチョチョチョチョ（笑）お盃がチョンチョンチョンチョン音して、お前もアル中か、とおっしゃって、ヘェ私もアル中です。若いのにアル中か、こうおっしゃった。アル中とアル中でふるえまして（笑）座がワーッと笑うて機嫌をなおって頂いた。

川辺　トノさん気分があってやし。

長駒　西園寺さんはちょっとむつかしい方でした。

荒尾　松方さんはどうでした。

長駒　毎晩のように宴会がありました。元町を馬車で通って…川崎芳太郎さん、あの方は出勤は朝六時頃。

荒尾　遊びはどうでした。

長駒　面白おましたで。芳太郎さんはちょっとむつかしかった。松方さんは宴会の時は着物より襦袢の方が眼にたつんです。肩脱がしてお客さんと輪になって踊らせはる

荒尾　伊藤博文はどうでした。

長駒　伊藤さんはあまりお酒はあがらんように思いました。

行政　伊藤公は色の方や。ヨーケご親戚こさえてやった（笑）

長駒　私の友達もそうでしたね。

▽人物見立ては花隈にたのめ

荒尾　花隈で修業した姐さんは人間が出来

てるから、天下りでくる官庁の役人なんか適確に人物をつかむ。歓迎会などに来ると芸者さんがその人の根性を看破するいうんです。花隈の芸者にもてなんだら、役人はその時分にはアカン（笑）腹見すかされる。

長駒　そういいはりましたわ。エラソーに今度代ってきなはった人よろしいで…あんたらそれわかるか…きっとよろしいわ…て当てるんです。また当りますねん。

――当時は何人ぐらいおられました。

長駒　三～四百人近くいました。仰山おました。今は五十人も働いてませんやろ、六十人もいるんですかね。

――花隈の外には？

長駒　外には柳原、花隈と一緒ぐらいの格ですかね。そして福原がちょっとおちますねん。

荒尾　花隈の姐さんいうたら、天下一流の人の座にはべってるので実に行儀がよかった。その一番の例は津島寿一さん。終戦後バージになってる時分に、荒尾さん、花隈で遊びたいので一流の姐さん選ってくれへんか、ヨッシャー、一番に長駒さん、二におてるさん、死んだ歌丸さん、…津島さんは東京で遊びに遊んで自称道楽もん。ヤングッシマ言うて、世界の外交の舞台を歩いた人がね。いっぺんに長駒さんに惚れて、東京へ何べんも呼ばれはったね。こっち来ても僕の友達の猛獣の家（てる香さん）へ泊られた。

市営駐車場の完成を急ぐ花隈城周辺…昭和44年2月撮影

▽花代一本（一時間）十四銭

――花代いくらぐらいでしたか。

長駒　その時分ね、一本が十四銭ですか、それが四本ですからナ。私らの出た時分はお線香立てたと思いますねん。一本たったら一時間、それでいくら…。

行政　線香代、いいよりましたね。

荒尾　伝説かもわからんけど、三蓋松さんは泉水の水をかい出して、牛乳ぶち込んで玉子をぶちこんでその中に裸になって入って、この中の玉子の黄味を吸うてきて、こわさんように座敷の茶碗に吐き出したら十円呉れたというんだ。あんたみたいな上品な人はやらなかったかもしれんけど。

長駒　私、あの方くじったんだ。呼んでくれはったんですけど、私ボーンとやったんで（笑）

行政　親戚にならず（笑）

長駒　そしてあの方妙でっせ。お正月でうち来はったら、自分のこれだけ座布団ひかせるねん。どんなええ芸者でも親戚でない人にはひかせはりません。今日ら拝借してますけど、私ひいたことないでっせ。

川辺　芸者の座布団いうのはないでしょう

行政　そのかわりうしろへ吊ってるわナ。

長駒　へー（笑）まァ若い時は吊ってしま

せんけどね。

川辺　ちょっと後になるけど金子さん（直吉）なんかは…。

長駒　金子さんは硬い方で洋服もネクタイも一人で着てやない。柳田さんいう方がずっと面倒見ててでした。宴会に来ても洋服に白足袋はいて（笑）あの時代赤いネクタイなんかしてる人ないでしょ。ずっとしてはりましたで。後藤新平さんら一緒に来ててした。何べん来ても芸者の名前ちょっとも覚えてやないの。なんぼたってもみんな姐さんでしたわ。

――酒豪はどなたかありますか。

長駒　さあ、どんな方ですかいな。

行政　自分より上ナイサカイ（笑）

長駒　私はほんまに杯洗で飲まされました昔のお客さんは、よう飲まへんてなこと言うたら、何！いうて頭から酒をかけるお客さんがおました。いっぺん芸者さんがお酒を杯洗に捨てたんです。お客さんが怒って杯洗の水みな飲みはった、それには芸者さんがまいりましたね。

行政　お客さんと共に楽しんでこそ芸者だもんね。チャーリーチャップリンが来た時はおられましたか。

長駒　止めてたんでしょかね、知りまへん二十五年止めてましたからね。

荒尾　当時の芸能人はどうでした。

長駒　鷹治郎さん（先代大成駒屋）沢正、中村福助さん（先代）…大黒座へかかったら、よう来よってでした。私らもよう行きました。鐘紡の宴会いうたら（武藤さん時代）お芝居ですねん。白襟紋付でお客さんしてでした。

両袖の桟敷を借り切ってたいしたもんです。お芝居見せてもろてお祝儀五円もらえました。

▽ドン山のドン

荒尾　花隈城をドン山いうて、ドンの鳴ってたのはいつ頃までです。

川辺　ここでドン鳴らすのやないでしょう。ドンは今の中突堤、二本あって片方が鳴らなんだら片方打つ。

行政　ドンが鳴るからドンタク、言うのがありますな。十二時を知らせた。石垣に飛び出してるのは大砲のドンのつもりですカイナ。

荒尾　東郷さんが住んだり日本最初の映画上映をやったり、とにかく花隈は話題が豊富で栄えていたね。

――話はつきませんがドンも鳴りましたので一応ここらで終らせて頂きます。ありがとうございました。

（記録・本地）

ビスケットには ねん土が入っている

ビスケットにねん土がはいっているといったらおどろく人もいるかも知れない。だがほんとうなのだ。

ねん土にはベントナイトやモンモリロナイトといった鉱物の小さなつぶが入っている。ビスケットに入れるのはこのベントナイトといってビスケットを固たくパリッとするやく目をするのである。

ただしこのベントナイトはチクロ等とちがいまったく無害だからご心配なく。

「ドン山」懐古

木内　勇

一番の踏切、二番の踏切、まだ国鉄が高架でなかった頃花隈城趾の横を黒い煙を吐きながら、汽車は「ポッポシュッシュ」と走っていた。花隈城趾の碑石、電信校舎、時を知らす表時球塔、神港倶楽部等々、今は只懐かしい愛郷の思い出である。城趾の南側に生れ、今尚住みついている一人の男には殊の外感慨無量なものがある。

花隈城趾は神戸の町、神戸の港を一目で見下ろす高台で当時何階建というビルも建っていなかったので金波銀波の神戸港をながめ、遠く紀州の連山まで見渡せたものである。今は花隈公園となり高台の地下を発掘し、神戸市の自動車駐車場と変ってしまった。

永禄十年、今より約四百年の昔、織田信長の命により荒木村重が築城された花隈城であったが戦国風雲急を告げる頃、伊丹・尼崎・花隈の城主であった「摂津守荒木村重」の言動が信長の怒りを誘い、天正八年信長の軍兵池田信輝その子輝政の軍勢に東は生田の森、西は金剛山（今の大倉山）、北は諏訪山より攻撃され遂に花隈城は落城し、老松を残して荒廃の城趾と化した。

今に残る「花隈城趾の碑」の題字は、花隈に因縁深き岡山県、池田宜政侯爵の揮毫にかかるものであるが老松一本も枯れ、第二次世界大戦の昭和二十年三月十七日、神戸市に対する米機B29号による夜間大空襲で只一つ残っていた碑石も戦火をうけ「ヒビ」割れのボロボロ姿で城趾の角隅になおも史跡として専心花隈城を守り続けている。その碑前に立つとき、当時の城、現在花隈町福徳寺の周辺、天守閣・二の丸・三の丸と続き「チョンマゲかみしも姿」の城主荒木村重の姿が澎湃として浮かび出されるのである。

花隈落城の後、子、池田信輝は神戸市兵庫区関屋町附近に兵庫城を築いたと伝えられ、また池田輝政は子信輝と共に姫路城を修築したと伝えられている。

当時お城を中心にして東側に侍町が二カ所、足軽町が三カ所あり、城の西側に町家があったと伝えられ、城に城下町、また城下町に城を思い浮かべるわけである。

ドン山の面影（神戸市文化財調査報告書より転載）

序に兵庫県内の城、即ち古城趾を文献により列挙してみると、

摂津に　花隈城、滝山城、伊丹城、赤松城、尼崎城、兵庫城、・三田城。

丹波に　黒井城、氷上城、篠山城・柏原城。

但馬に　竹田城、八木城、小盗山城、・出石城、・豊岡城、・村岡城。

播磨に　三木城、船上城、加古川城、高砂城、御着城、室津城、置塩城、白旗城、宍粟城、家島城、竜野城、三日月城、赤穂城、明石城、姫路城、以下・印三草城、小野城、林田城、安志城、山崎城、福本城（・印は陣屋だった）

の数々が挙げられ何れも四百年前、戦国の時代から次々築城され、その城としての風格は立派であった由である。以上列記したお城の趾は史跡として残すのみで殆んど明治維新の際廃城となっている。

城下町「花熊」は後に「花隈村」となり、今日の花隈町と変った。維新前後の「花隈村」は現在の花隈町、下山手通六丁目、中山手通五、六丁目、南側北長狭通五、六丁目

の一部に跨る地域であったらしく明治元年十一月、神戸村を神戸町に、明治七年に元町通、北長狭通が生れ、大正に入り、区制が布かれ戦後、神戸区は生田区に変更されたものである。

戦前を回顧して懐しく浮ぶことは、明治時代から建立されてあったと云う、花隈城趾の丘の表時球塔である。子供の頃花隈城趾の高台を「ドン山」と云い、表時球塔のことを「ドン玉」と呼んでいた。昔神戸港務局が正午の時報と船舶からの目印の目標として、花隈城趾の高台に高さ百米もある表時球塔が建てられ、正午になると、その塔に登り切った球が直下に落下し、「ドン」と云う大砲音を出す原始的な時報搭載機であった訳であるが、今では知っている人も稀である。記録によると、時報塔建設に当り城趾より墓石が出たとあるが、後に出た五輪の塔と共に町内福徳寺に安置されているものと思う。

神戸市の都市計画による昭和三十八年九月の花隈城趾南接の道路拡張工事（神戸高速鉄道敷設工事）に際し、工事現場より室町時代！の五輪の塔十数基が掘り出されたので花隈福徳寺に納められ、昭和四十四年三月三十一日、花隈城物故者四百年忌法要が花隈自治会が中心となり、城主の子孫、地元の有志によりしめやかに盛大に供養が施行された。私も列席の栄に喜んでいる一人である。

表時球塔も昭和に入って塔のみが残り、船舶の目標に専ら利用され、雷を呼ぶ落雷の塔として附近住民の記憶に新しいものがあったが、今は昔、百米の塔は神戸花隈公園と自動車駐車場の建設で除去され、その影も消え失せたものである。

花隈小学校と周辺

都市計画道路工事により、元町四丁目本通り北側よりも無縁墓石が出て来たが相当古代の墓石である。その附近は神戸浦と称し、また茶屋村と云い、花隈城内城下町であったと云う。花隈城福徳寺は明治の初期、花隈小学校として同寺の本堂で仮開設されたと聞いている。私は神戸小学校卒業で小学二年生の頃は男女共学制であったことを記憶している。

花隈は明治の開港にふさわしく料亭と、お茶屋の町、旅館の町でもあった。

ネオンもない静かに響く三味の音と、柳の枝にゆれて見ゆる高級の料亭街、特有の雰囲気をかもし出していたもの

である。花隈芸者の芳名は帝都に及び高官遊客はわざわざ西下して豪遊したと聞いている。

北長狭通六丁目に芸妓の検番があり、そこから引っ切りなしに芸妓が人力車で、或いは二人曳きで各料亭に侍りこの世の春を謳歌したのもこの頃。

遂には花隈おどりの歴史をあみ出し神戸の花街「ナンバーワン」になったが、戦時中芸者さんも戦時工場に徴用されたを機にこの花街も古城跡の老松と化した感のないではないが、芸は滅びず今日に及んでいる。

マリリン・モンローも客としてこの地に遊び、また花隈おどりの年々旺盛になることを郷土・神戸花隈のために祈るものである。

ちびっ子広場

交通禍と遊び場所のない子供に遊び場所をとの神戸市の提唱に依り花隈自治会では全市に先きがけて町内の中心の空地（会員坂本清重氏所有）を無償で借り受け、役員奉仕で整地砂場を作り役所よりブランコ・スベリ台・ベンチの貸与を受け町内の子供さんに大いに利用して貰った。地主の都合と近くに花隈公園（園内に児童遊び場あり）が出来たため約二ヶ年で閉鎖をしたが市の提唱に先べんをつけ遂次全市に普及された功績は大きかった。

▲花隈芸妓の茶会風景

花隈の人

1 長駒姐さん

―日本最古参現役芸妓―

お元気な長駒姐さん

花柳界の斜陽化（？）と共に若い人で新しく芸妓さんになろうという人が少なくなり、芸妓さんの年齢が高令化している折柄、これまた芳紀（？）まさに八十六才という全国一の超々老妓がこの花隈で今も元気で左褄をとっておられる。

それが花隈の人、長駒さんこと今井きみさんである。

初めて花隈にお目見えしたのが十六才の時というから、ちょうど今から七十年前、日露戦争の始まるよりまだ三、四年前で何しろ昔のお客様の顔ぶれとして伊藤博文、西園寺公望、桂太郎、広瀬中佐（当時大尉）その人々にお酌をしたという歴史的な人である。

今も尚年より二十才も三十才も若く見えそうなかくしゃくなあで姿（？）でお座敷をつとめ、全国最年長の現役芸妓さんとして花隈花柳界の生字引であり、ある意味では花隈の持つ誇りの人である。

略歴をちょっと述べさせて貰うと、

明治十八年十二月　滋賀県近江八幡に生まる

明治三十四年　花柳界に身を投じお酌をつとめる

（当時の置屋・金山）

大正四年　花隈検番が中検・新中検に別れたとき

どちらにも行かねばならない義理の板ばさみで芸妓稼業をやめる

昭和十年　花隈へ復帰、長唄の師匠

昭和十二年　芸妓として再つとめ

昭和二十七年　料亭、長駒を経営、芸妓と兼業、現在に至る

昔から酒斗尚辞せずの酒豪だったとか、今は灯ともし頃にならないと飲まないと決めておられるそうだが、その面影は今でも晩酌約三合（〇・五四立）は欠かさないとか、その上料亭の女将連中と年一～二回の遠出旅行にも進んで参加、絶対に同行の人々の手足まといにならないとのことである。

その元気さにだけでもあやかりたいものである。現在では自分の芸名をそのまま「長駒」という料亭を息子さんに委せて自分はお座敷第一、座敷マナーも立派で孫のような若い芸妓さんに尊敬されている。

長駒さんのことをいろいろ聞いていると話題はつきないが、ご本人から変った遺言を聞いた。これは面白い、流石は長駒さんらしいとご本人のお許しを頂いたので誌面に公表（?）することにした。

「私しゃもう八十六才、ボッボッお迎えがくると思う。私が死んだら抹香くさい線香やお経はやめて、集って頂いた人達に〝かがみ〟をぬいてウントご馳走をして大いに呑み、食べて貰う。そして私の吹き込んであるテープレコーダーの長唄や哥沢、小唄で大いに散財してほしい」と

兎角元気な人である。いつまでも〳〵お元気で花隈名物の一つとして長生きされるよう祈って紹介に代えさせて頂く。

吉川記

花隈からミス神戸（生田区）

浜野美栄子さん

昭和四十四年度のミス神戸に浜野美栄子さんが選出されました。美栄子さんは当時十九才、花隈自治会・花隈新興会々長浜野吉男氏の長女で親和高女卒業後家事の御手伝いをされながらお稽古事・茶・生花・日舞を習っておられ山手婦人会推選でした。

身長162　バスト82　ウエスト58　ヒップ86

趣味は語学（パルモア学院本科卒業）タイプでしとやかなお嬢さん。御両親の薫陶よろしくミス神戸になられてからは県・市・区の諸行事に出席され、よき親善使節としての責務を全うされておられます。

吾が花隈の誇りの一つです。

2

村上華岳画伯

ー世界画聖に列する名人ー

幼にしてわが神戸に来住、花隈村庄屋、村上五郎兵衛氏に養われ、大正八年十一月五十二才の若さで亡くなった村上華岳画伯、その人の画業がこの節世界画聖と呼ばれる人々と比肩されてきたことに対しては、神戸人として大きな誇りを感ずるのである。

画伯がそんなに高名になっているのに地元の神戸では案外それが知られていないのはなぜだろう。

華岳画伯は生来病弱で作品も売って喰わねばならない人でなかったので気に入った良心的な作品でないとメッタに世に出さず色紙一枚、扇面一本といえどもゆるがせにしなかったので作品の少ないこと、今ひとつ作品があっても所蔵家が大切がって人の目にふれる処へ出さないこともたしかにその理由であろう。

しかし地元の市や県の権威のある機関で展覧会等を催して華岳芸術の周知を図る必要があるのではなかろうか。微力ではあったが、僕が市立美術館長時代十年の間に三回華岳展を催し、先生の作品の大好評であったのは先生に心服する僕の大きな喜びであった。また最近学友の高田一市君を煩わしてその経営する「コロンビア学院」の一角に「華岳先生宅趾」の石碑を建立、先生の遺徳を偲ぶよすがが出来たことも花隈の史跡として後世に残る嬉しい企てだと自負している。

画伯は明治二十一年七月大阪天満の天神さんの近くで生まれ、本家は武田氏で甲州武田信玄を遠祖にもつ一族といわれている。赤ちゃんのころ、故あって親族に当る神戸花隈村の庄屋村上五郎兵衛さんの家に貰われて来て、小学校を出ると画が好きなままに明治三十四年京都市立美術工芸学校に入り、そこを出ると今度は明治四十二年京都市絵画専門学校（現美大）に進学、卒業制作に描いた大作「二月の頃」（明治四十四年作）が既に人々の目を驚かせた。

三十代で描いた「裸婦」「日高川」、関東震災の際惜しくも焼失してしまった「聖者の死」等が有名であったが、身

△前兵庫県知事金井元彦氏の筆になる記念碑

体を酷く悪くして昭和二年以来死ぬまで花隈の自宅にこもり、痼疾の喘息と闘いながら制作を続けていた。ご自分ではこの制作の態度を「密室の祈り」と云っておられたようだ。

華岳画伯の作品には仏画も多いが山や花も相当にある。そして晩年作には好んで「花隈邸舎」の大きな印を押しておられる。印肉の色調もご自分で調合され大変絵にマッチし、押してある画面の場所も心にくいほど好適の場所で絵を一層引き立てているような気がする。

小隠は山に隠れ、大隠は町に隠れるというが、華岳先生は花隈のお住居が殊のほかお好きであったらしくこの言葉がピッタリである。

花隈の住居から足をのばして描かれた一見平凡に見える再度山や六甲・芦屋の山々、或いは布引の渓谷等、山水の大自然というものを深く深く観察して、その表現は外象を超越して、つまり山の持っている霊気というものを内臓して表現しているので名山以上の名山の絵になっていることが多い。

華岳画伯は金を貰って絵を描いた人ではないので、知人や気持ちの合った人に贈られたそれらの絵に、一世を驚かす名画が多いようである。

現に日支事変のはじまった頃、征途につくべく神戸に来て花隈の村上家に分宿した兵隊さんにその武運長久を心から祈念して描いてやったという不動尊の名作の噂もあるので、もし残っておれば「石野雅兄護持」と書いて残されている石野貞雄氏蔵の名作と共に国宝級のものであろう。

【荒尾親成】

金山平三画伯の逸話等を掲載しようと思いましたが、画伯の幼年・小学生時代の思い出その他は殆んどわからないとの画伯未亡人らくさん（花隈町129に居住、82才）のお話でしたので画伯の略年譜を掲載させて頂きました。

委嘱される

昭和34年　5月第4回美術家祭で表彰を受ける

〃　36年　9月～12月ヨーロッパ各地旅行

〃　37年　3月大丸神戸店において金山平三展開催される（風景画100点）

〃　39年　7月15日死去、謚号「盛夏院釈平三」遺志により葬儀は行なわず、叙位叙勲も辞退する

主な作品

「氷すべり」第11回文展無鑑査出品特選

「さびれたる寛城子」「諏訪湖の富士」第12回文展無鑑査

「菊」大正11年4月パリで開かれた日本美術展出品

「秋」「湖畔の村」第8回帝展出品無鑑査

「菊」第9回帝展出品（現在東京国立近代美術館所蔵）

「結氷」第12回帝展無鑑査出品

「風雨の翌日」第14回帝展出品（現東京国立近代美術館所蔵）

「夏の内海」昭和11年6月シドニー国際美術展覧会に出品

個展その他

昭和18年4月　神戸画廊

〃　20年7月　名古屋美光社

〃　27年7月　大阪美光社

〃　28年11月　大阪美光社

〃　29年12月　名古屋美光社

〃　30年7月　大阪美光社

〃　31年5月　大阪高島屋

〃　32年5月　大阪美光社

〃　33年1月　美光社東京画廊

〃　35年8月　日本橋高島屋

〃　37年3月　大丸神戸店

〃　9月　日動画廊

〃　38年5月　大丸大阪店

花隈の人 3 金山平三画伯

左は「金山画伯旧宅の地」の記念碑と右はお元気な頃の金山平三画伯

〔略 年 譜〕

明治16年　12月18日元町3丁目244で生まれる
〃　32年　花隈町5番地に移る（現在いさみ北側）
〃　37年　4月立教学院立教中学校卒業
〃　42年　3月東京美術学校西洋画科本科卒業（卒業生代表として答辞をのべる）
〃　44年　秋、花隈町129番地に移る
〃　45年　1月神戸出帆パリへ
大正4年　11月神戸着帰国
〃　5年　10月文部省第10回美術展覧会（文展）初入選2点、内「夏の内海」は特選（現在東京国立近代美術館所蔵）
〃　6年　春、満州旅行
〃　8年　3月東京女子高等師範学校（現在お茶の水女子大学）講師理学士牧田らくさんと結婚
大正8年　9月帝国美術院展覧会（帝展）審査委員となる（昭和8年まで連続委員）
〃　13年　3月～5月中国旅行、蘇州・南京・上海を巡る
昭和10年　7月新帝展に反対する旧帝展無審査の有志と新団体「第二部会」を組織する
〃　11年　聖徳記念絵画館壁画完成式が行なわれ、神戸市奉納の「日清役平壌戦」を制作する
9月～10月朝鮮に旅行、平壌・京城・金剛山を巡る
〃　12年　8月第1回文展審査員委嘱の交渉を受けたが辞退する
〃　16年　10月再度朝鮮へ旅行
〃　18年　4月神戸画廊において金山平三作品鑑賞展
〃　19年　7月帝室技芸員となる
〃　32年　2月日本芸術会員に任命される
〃　34年　3月社団法人日展第二科顧問に

東郷井と長籔水路

森川しず

花隈は元町と共にとてもなつかしい地名の呼名であります。

明治七年生まれの母からよく聞かされたことどもを思いうかべてみることに致しましょう。

母の幼少の頃には花隈から四宮神社にかけての一帯は春ともなればたんぽぽ・すみれ・れんげ草が美しく咲きみだれて毛せんを敷きつめたようで、母はよくれんげをつんで遊んだと云っておりました。

いとものどかな風景のようで、今から思えば夢のようで想像もつかないことです。

その昔、我が家の祖父森川為助（文政十二年生まれ）が慶応三年花隈の地に（兵庫・神戸）写真館の第一号を開いた発祥の地であります。

アーチ型の門を構えたスマートな洋館で、その建築は走水村（現在元町五丁目山側）の木村金次郎という大工の頭梁の作で、一名「大金」と呼んでいたそうです。その子孫に当たる方は戦災で今はいずこにお住いかわからなくなりました。

記念にしていた洋館の写真はおしくも戦災でなくしました。その最もよく似た洋館が生田区山本通四丁目の山側中程につい二年前（昭和四十三年）まで名残りをとめていましたが老朽化したものか姿を消しました。

その写真を朝日新聞神戸支局の神塚記者から頂き、大切に昔のおもかげを保存しております。

森川写真館の跡に「治作」という料理屋がありまして、本多さんという方でしたが東京の方へお移りになったと聞いております。戦後には全但バスの駐車場になっておりましたが、現在では商工会館と中原ゴム会社になっております。

その上隣りに神港倶楽部がありました。表門の南東の角には「東郷井」がありましたが、戦後は阪神上水道事務所

ができ、また最近には川崎重工業の保健会館が建ち、そのときに惜しくも「東郷井」は埋めたてられ、その碑だけが淋しく建っています。私はその前を通る度にその碑を懐しく見て通ります。なんでもその昔、当時神戸におられた東郷元帥が毎日この井戸の清水を汲んで御用いになっていられたとか。

神港倶楽部の会員の方々が東郷さんを敬慕して永く由来を残して記念の碑として建てたと記されております。その筆跡は時の海軍中将小笠原長生とあり、昭和三年十二月の建立です。

東郷井の碑。海軍中将小笠原長生氏の書、昭和3年12月建立

その東側の一帯が昔の三田藩の屋敷で藩主の九鬼さんがいられたところで、おひいさん（お姫さん）のお出ましには大ぜいのお供がつき大変なことだったとか、母からそんな話もよく聞かされたものです。

今はその周辺一帯は繊維問屋街となってすっかり変ってしまいました。

その昔、そのそばに長籔という深い谷間があり、きれいな清水が流れていたとのことです。

戦後長籔趾の碑が進藤医院の横手に永い間横たわっておりましたが、その碑も今はいずこにか知る由もありませんが残念なことです。

花隈城趾の高台にドンの玉（時報球）がありまして、お昼になるとその玉が「ドーン」と大きな音をたてて上るのです。周辺の人々はこれをお昼の合図にしていましたが、いつの間にやらその姿を消してしまいました。それでも、「ドン山」という言葉はつい最近まで残っておりました。

戦前に北長狭通六丁目に神戸幼稚園がありました。子供を幼稚園に送り迎えをしていた頃、ちょうど幼稚園の上隣りに花隈の芸者さんの置屋がありまして、清元・長唄・常盤津のうた声が三味線の音と共に聞こえてきて別世界のような感じでした。みずみずしい黒髪の日本髪姿の芸者さん

が人力車に乗ってお花に出かけるのをよく見かけたものです。

また勢揃いをしてみなと祭等に参加されて街をねり歩いておられたことも今はただなつかしい思い出の一つとなりまして時代の移り変りとは申すもののちょっと淋しい気がいたします。

神戸の中心である花隈の城趾も今は名ばかりで面影は一つもなく噴水公園と化して地下は自動車の駐車場となりました。お城の復元がなぜできなかったことかとかえすがえすも残念なことであります。

きれいな清水が流れていた「長藪水路の跡」の碑、昭和10年2月建立

他都市のことを申し上げて誠に申訳もございませんが、広島では戦災にあったお城が昭和四十三年十月十九日の朝のニュースで報ぜられましたし、また出石では昭和四十三年十一月八日の神戸新聞に明治百年の記念事業として百年目に出石城が立派に復元されたニュース等ほんとうにうらやましい限りでございました。

昭和四十三年十一月十一日に生田区で婦人市政懇談会がもたれました時に花隈城趾にお城の模型のようなもの、または火の見やぐらのようなものでも造って頂きたいと申し上げましたが、お城の恰好などがわからないから、そんなのはできないとのご答弁でございました。お城趾として残される限り、あの石垣ぐらいははりぼてふうでなく、もうちょっと立派なものができなかったことかと、よるとさわるとつぶやいております。

とりとめのないことで誌上をけがしまして誠に申し訳けございません。

花隈が永久に栄えあれとお祈り申し上げます。

注 筆者は現在三宮センター街、さんプラザにおいて眼鏡店「めがねの森川」を経営しておられ、地区婦人会の幹部としてご活躍中であります。

幼いときの花隈

小林通男

花隈で有名な大いちょうが厳島神社西裏手にあり、秋ともなると黄金色の葉があたりに舞い散り、大風の吹いた翌朝など落ちた銀杏ひろいに嬉々とたわむれたこともあったが、第二次大戦末期の空襲で古きよき花隈の町なみと共にあとかたもなく消えてしまった。

今はなき当時のそこかしこを思いつくままにペンを走らせてみた。

三木マンション角が「あらい」さんで、その斜め向いの薄暗い土間に糊の香のただよう洗張屋さんがあって路端で「しんし張り」をしていたのを古風な商売だなあと思ったことがある。

「富士の家」さんと川重健保会館との境目が高い石垣で、その下が民家の裏手にあたり小さなドブ溝のため、晩秋には賑やかなほどコオロギのいい声が聞こえ、よく友達と捕りにいったものである。

なお川重健保会館の以前は神港倶楽部とか、古風なペンキ塗二階建があり、広間で呉服や雑貨の展示即売や地方巡業の淡路人形芝居が興行せられ、その動く目・眉・口に子供心の物めずらしさを感じさせられた。

その庭の片隅にあった苔むした石の東郷井戸はあまり深くなく、うす黒くよどんだ水で小石を投げ入れて叱られたこともあったが、今は石に記された筆あとに面影を偲ぶだけ。

南隣小路をへだてた所が現在向い側に移っている「治作」さんで、しぶい高い板塀に蔦がからみ、威勢のよい板場さんの高下駄の音や、仲居さんの立ち働く広い調理場の終日つけられたままの電灯の光に浮かび上がるのを勝手口からかいま見られたものであり、昨今は農薬のためか「どじょう」も少なくなったが、ここの「柳川鍋」の味は子供心にも忘れられないものの一つであった。

活気があるといえば福徳寺の北隣りにあった「魚善」さ

んの出入商人の賑やかな声が毎日のように入荷する鮮魚の臭い、大きな籠と共に印象をよみがえらせる。

福徳寺東南角がいつの時か町内会の事務所になっていたような記憶もあるが、昨今完成した阪急花隈駅東口一帯にあった料亭「吟松亭」の名物大楠のかおりと共に追憶の彼方へと消えつつある。

花隈中央通りを西にへだてた所に「かまぼこや」があって、その店頭で天ぷらの材料を練り、その場で揚げる職人の腕のリズムに見いったことも再三ある。

その西隣りにどっしりした古風な大門の、デンと構えた幼稚園があり、初夏ともなると薄紫の藤の花のかおりがオルガンに合わせる園児の歌と共に外まで風に運ばれてきたのもなつかしい。

その北側の高台で今の「青葉」さんを西へ這入った所が中検番で片や「松の家」さんの南側、当時では神戸でもすごく先端をいつたであろう「花隈ダンスホール」の前を東へ折れたところが新中検番で、いずれもあでやかに装った多数の人々の出入りで花隈の繁昌さを、まざまざ感じさせたものである。

中央通りを下った国鉄ガード下に戦前まで暫くの間、当時流行の短編映画上映館ができ、よく見に行った。

その他小間物屋・履物屋・美粧院・酒場・飲食店等、鉄道筋は賑やかな商店街でもあった。今の本通りアーチの傍の石垣は、当時では珍らしい三階建の「吉野館」と呼ばれていた旅館跡で、失火で焼失するまでは宿泊人が手すり越しに道ゆく人のあで姿にみとれていたのを思いだす。

あちこち旅館の多くも見たが、今にして思えばこんないい眺めの旅館は全国でも珍しかったのではなかろうか。

「成駒家」さんの所に以前煙草屋さんがあって、叔母から「あそこのおばあちゃんは、前は立派な花隈の芸妓さんだったのですよ」と聞かされていたので訳もなく緊張して煙草を買いにいったこともある。

「松葉」さんの大通りに面したところが交番所で、ガラス窓に添い一本のざくろの樹があって、毎年赤い花の咲いたあと相当数の実をつけた。そこの長いサーベルをさげていた老巡査から一度その実を貰ったのに甘え詰所の内まで這込んで暫々いたずらしたこと、貰った果肉の甘ずっぱさと共に思いだす。

「芳地酒店」さんの場所には「七福湯」という風呂屋さんが、その脱衣場のかもいに取付けた大扇子を蝶つがいの

ギーギーときしむ金具の音を聞きつつ紐を引っぱっては涼をとったのが印象的である。

坂道をへだてた斜め向いの「いさ美」さんの所は花柳流の稽古場だったように覚えている。コロンビア学院の一部と花隈温泉（中川役員経営）のあたりは村上華岳画伯の住居でその表門のどっしりとした構えは、昔の家老屋敷のような威厳が感じられたのと、本通りに面して建てられた花隈の大地主の一人である岩崎さんの御影石の階段で木組みのしっかりした邸宅が今に目に残る。

その頃はまだ活躍していた「人力車」屋、たしかに二個所あったハイヤーが酔客の送迎に夜遅くまで走り廻り、料亭や路地に客待ちしたりするのがよく見うけられた。

一歩花隈の街に足を踏み入れた人は、通りの足音が十二時を過ぎても途絶えることなく、紅燈の光を縫って売り歩く物売りの声や、あちこちではなやいだ話し声、さんざめきお屋敷帰りの芸妓さん達のすれ違う際の甘いかおりなどに接する時、福原の花街とはまた違った花隈花街特有のなまめかしい空気を、口や筆ではどのように表現しても充分に表わすことはむつかしい。これらのふんいきも年一回開催される花隈両検番の温習会をもって頂点となる。

会場は新開地の松竹劇場や、今はなき神戸駅前の八千代座等で五日乃至一週間に亘り昼夜の二部に分かれ催され、この期間立方・地方はもちろん出演者を中心とした関係者、普段花隈をひいきにされるお客共々街中ぐるみの声援で自然と話題が一点にしぼられて熱っぽいまでのふんいきになる。もっともこれらの盛り上りはつくりあげようとしてできるものでもなく、当時の花隈という一つの息吹きの押えきれない躍動ともいうべきものであったろう。

その他芸者衆の多く住んでいた赤い煉瓦を敷きつめた小路、出る出ると噂ばかりで一度も化けて出た話を聞かぬ狸坂、新しい名所ともなった花隈公園の元通称「ドン山」の毎正午知らされた「時報」のことなども古い思い出は泉のように湧いては消える。

大正初期に開通した山手線の市電も今年の三月で取り払われ、幾多の人々を花隈の街へ送り込んだグリーン色の神戸名物の電車も今は走らない。

いろいろな楽しい思い出も時の流れに乗って追憶の彼方へと去っていく。

しかし、又いつの日か、あの時分の花隈に返ることを祈るのは、あえて私一人ではないのではなかろうか。

花隈夜ばなし

〈伊藤博文・初代県知事〉

花隈花街は明治開化と共に発展したところで、西国街道の中の二ツ茶屋村（今の元町通り）にあったお茶屋が神戸村として発達するにつれ、だんだんと丘の上にはい上って今の地に一大花町が出来上ったのである。艶話か情話かは別として年代順に夜ばなしを語ってみよう。

△初代兵庫県知事伊藤博文（左）と判事中島信行…明治初年花隈吟松亭の庭で…（出石町広戸すみ氏所蔵・兵庫県百年史による）

先ず最初に伊藤博文をあげよう。若冠二十八才で兵庫県知事になった彼は「常盤花壇」「吟松亭」などを根城に大いに夜の花隈を暴れ廻った。

立身出世と若さが時を得て意気大いに上り、兵庫県のための大活躍をしたのであるが、その昼のエネルギーが夜はそのまま紅灯の下に爆発したので、その豪遊ぶりは想像に余るものがあった。

伊藤知事の恩寵をうけた女性は五指を下らんが、もっとも艶名を流したのは「K弥」と名乗る美妓であった。

現役の中でも歌栄・長駒さん等は当時の実況を知っていると思うが、彼女は今でも生国の広島に健在でいられるらしい。お逢いして当時の話を聞けば面白い歴史の反面も知れることだろう。

神戸が貿易港として発展するのに当時の清国人が果した役割は非常に大きかったが、彼等は花隈の発展にもまた大きな力になっている。

神戸の勃興期はだいたい日清戦争後の明治三十年ごろに

始まり、欧州大戦のあった大正七年頃までが最盛期であった。

その最初の明治三十年頃、それまで大阪の川口で貿易をやっていた清国人が大挙して神戸に移って来た。

当時の神戸の豪商兼松房次郎・山本亀太・平野重太郎・滝川弁三などという人達が発起総代になって欣喜雀躍したことが記録に残っている。

彼等の出身は主に広東省であったが新鮮な土地に来て、しかも土地の有志から大歓迎をうけた彼等の心中も悪かろうはずはない。しかも神戸は内海県知事以来「会食するには必ず妓を聘す」の善良な習慣？があったので歓迎の席にはその多くは花隈の名妓・美妓連が裾をひいてはべったものである。

彼等は口々に「ニッポンクーニャン・トントンデハオハオ」てな調子で、眼尻を下げて喜んでいたそうである。

明治の御代は日本歴史の中でも、もっとも花々しい時代であったが、その日本の隆盛の陰で当時日本に来ていた清国人の果した役割はまことに大きい。それは昼の貿易だけでなく夜の花隈にも大きく響いており、今でも花隈のどこかにその名残りがある。

大正初期の好景気時代になると新興成金や旧地主の中から「花隈大尽」がボッボッ現われるようになった。

その頃のお茶屋は百数十余軒、芸妓は五百人ほどであったが、今でも当時を知る人の口にする店は中村屋・梅太楼・玉川・吟松亭・常盤花壇などであり、芸者衆の中では梅作・お梶・八重梅・政菊・豆千代・金弥・〆太郎・とんぼ、それに今でも現役で昔の色香を失わぬ長駒・歌栄さんらである。

＜マッチ大尽・喜三郎＞

この辺で一ぺん過去帳をひっくり返して当時の旦那衆の二、三を書いてみよう。

中村屋を根城に日夜豪遊を極めたマッチ大尽に喜三郎というサムライがいた。

マッチは当時は花形産業中の花形であった。滝川マッチ・直木マッチなど隆々たる新興勢力と並んで、上筒井に工場を持つHマッチの大ボスであった。銭が儲かって使うのに苦労するぐらいの勢いで、銭がある上にこの喜三郎さん

がまた持って生まれた好色男で、彼が手掛けた女は花隈だけでも数えきれんぐらいの数にのぼった。

喜三郎さんは仕事の関係で毎年よく海外へ旅行したが、時には彼女お内儀取巻きの大ぜいで出かけたこともある。花隈のお梶さんも上海まで同行したとか、またロンドンでは留学生や日本人を呼んで豪遊したその中には若き日の宮田重雄さんの姿もあった。

〈S松さん〉

神戸から出た偉大な歴史上の人物としての松方幸次郎さんも花隈愛好家の一人である。

齢八十をすぎてなおカクシャクとして神戸財界の最長老的存在である滝川マッチの滝川儀作も常連の一人である。

花隈豪遊伝の中で落としてはならん人に今は故人となった「S松」さんがある。この人は前述の喜三郎さんと違って祖先伝来の大地主である。灘区一帯山の上に至るまで彼の所領で、そこから上る地代家賃が一時間に八十円ぐらいであった。大正十年ころのことだから、今の相場にすれば千倍としても一時間八万円になる。実勢価値はもっと大きいものであった。

彼はそれをモト手にして月の内二十日間を花隈の「中光」を根城にして遊び暮らした道楽の家元みたいな男であった。役者にも稀な男前で上背があり、その上ゼニの衣を着たような男だから、周囲からチャホヤされるし、惚れる女も多かった。彼は常に幇間や落語家などの取巻きの数人連れ大手を振って花隈に乗り込んで来た。お座敷では自分の関係した芸者には全部座布団を敷かせて上座におき、たとえ姐さん芸者でも「他人〃」には座布団を与えず下座にすわらせた。

名妓で鳴らした「お梶さん」や今の花隈の女頭領の「歌栄」さんなども下座敷組であった。

〈勝田銀次郎と内田信也と〉

「H喜三郎」や「S松」のような正札付は別として、欧州大戦後の好況の波に乗って新興船成金として登場して来た人達にも花隈の青史に記録されるような天張れな人物も少からずいた。

だいたい花隈という花街は海運の隆昌と表裏一体の運命をたどっている。日本の船名にはご存知の通り〇〇と「丸」がついているが「歌丸」「鈴丸」「人丸」などという芸名

は船と花隈との宿縁でもある。

欧州戦後の船成金のうち政治にも頭を突込み世間によく知られた人に勝田・内田の両雄がある。

勝田銀次郎さんは伊予の産で、その生涯は男一匹五月晴れと云ったような存在であった。好況の波に乗って派手に海運業界にデビューし、布引に勝田御殿を築造して泰然と構えたところは戦国の世に志を得た英雄の風姿であった。花隈粋史にこの人のことはあまり花々しくはないが、内田信也さんと共に夫人がそれ者上りであることはこの道でも相当なものであったことの証左である。

勝田翁は神戸市長を二期（八年）つとめ稀代の名市長とうたわれたものである。

内田信也さんの方は色気もタップリあって三井出身の成功第一等の人物であると共に花隈でも侠遊第一等の人物であった。だいたい三井マンというのは巨大な商社組織に育てられるので一人で風雪の中に飛び出すような野性味のある人は少ないが、内田さんはその数少ない中の最も秀れた人で独立して内田汽船を興した。儲けの中から県立病院に内田寮を寄贈して世の福祉事業にも大きな足跡を残しているが、花隈の里でもあの独特なマスクで書生っぽい遊びに興じ、夫人も「梅之助」と名乗る左褄であった。

戦後も吉田内閣の大臣になったりして一花咲かせたが、この人もかつてのよき時代の花隈族としてランキングされる存在であった。

以上花隈の夜ばなしとして書き上げたが、お借りした文献には前述の夫々の人のまだまだ詳しいエピソードや人柄を偲ばれることがたくさんあるのだが紙面に限りがあるので割愛させて貰った。

この永い年代の移り変りと共に花隈の名妓・美妓のことなどずいぶん面白いこともあるのだが、これはいずれまた稿を改めてお知らせしよう。

※昭和三十七年八月頃の兵庫新聞連載より抜萃転載いたしました。

下山手歩道橋

生田交通安全推進委員会
花隈地区委員長　中川善文

吾が花隈地区と山手地区に跨り歩道橋が出来た。下山手歩道橋という。

橋の上から東を眺めれば十二階建の県庁々舎が都心産業道路の右側にくっきりと焦茶色の姿を見せている。

西を見渡せば正面に西神戸の独立せる高取山が夕陽に映えて美しい。

北には背山の緑が目の前に迫ってくる。

南だけは残念乍ら景色は見えない。

橋の下の中心には神戸フラワーソサィテー寄贈の花の塔が緑の芝生に囲まれ、小ぢんまりした池の水面には水蓮の花が咲いている。こうした景色をゆっくり眺める事が出来るのである。

橋の下東西に流れる広い道路はおそらく神戸一番と言ってもよい位自動車の流れが激しく切れる事なく流れるというより奔流の如く走っているという方がピッタリの交通難所である。

生田警察署の統計によると毎年の死傷者が市内のベストテンに入る辱しい場所だったのである。

南北に亘る大通りも前述の花の塔で分断されその道幅も広いので歩行者にとってこの場所の横断は一苦労も二苦労もせねばならず命のちぢむ思いで渡ったものである。

人命尊重の今日、こんな事があるものかと横断歩道を作ったり、交通信号（町内山野井信雄氏寄贈）をつけたりしたが自動車の流れの方がドン〳〵増加して仲々災害は減りそうにない。

之では自動車の流れを変えるより方法はない、だが幹線道路の事であり絶体に望めそうにもない相談。

それではもう歩道橋を作るより他に良い知恵もうかばない。

吾々新興会の役員が相集まり山手地区にも呼びかけて之が建設を当局に陳情する事に相成った次第である。

山手地区も双手を挙げて賛成、附近官公署・病院・学校等

△西方から見た歩道橋。左手高層ビルは県庁舎。花の塔は街路柱の向うに見える。彫刻家新谷秀雄さんの作。

も賛成の署名を下さり昭和四十三年七月会長浜野吉男氏がこの陳情書を当局に届けたのである。

交通安全第一と考えている筈の当局も予算がないとか、場所の選定がむつかしいとか、利用状況も調査せねばならないとか仲々ウンといっては呉れなかったが、それでも吾々の熱意ある陳情を認め種々の調査を行い昭和四十四年秋之が工事に踏み切って下さったのである。

爾来数ヶ月の突貫工事で見事な歩道橋が出来上った。（昭和四十五年三月三十一日）

総工費一、六〇〇万円、全長六〇米・幅員一、五米の立派なものである。

橋上に立って下を走る車の流れをみてよくぞこの橋が出来た。何の心配もなしにゆっくり景色を眺め乍ら渡れる。ほんとうに結構な事だと今更乍ら嬉しい限りである。

開通後は利用する人が多く交通災害の話も聞かなくなった。

町内の名物の一つにもなった。いつまでも〳〵大ぜいの人に利用して頂いて、折角出来たこの歩道橋の使命を全うさせたいと願っている。

悲願

花隈未来像

吉川晴嵐

ボーッ！と汽笛が鳴って四国経由の観光船が入って来た。ここは別府航路発着場、神戸ポートタワーの真下である。「坊ちゃん」で知られる道後温泉から彼女が神戸へ来たのである。

出迎えた私も同郷で高校は彼女より二年上、松山の高校を卒業してすぐ就職、花隈のある料亭の板場見習、郷里が漁場で小さい時から魚については知識が豊富、魚の料理も板についたもの、これが私を板場の職人に向かわせたのである。先輩の指導で庖丁さばきも二年目ながらほめて貰えるようになった。神戸の街にもすっかり溶け込んだ。この時である郷里の彼女が高校卒業、彼女も神戸に職を求めて私を頼って来た。観光船から元気な朗かな姿が私の目に飛び込んで来た。

神戸が初めての彼女は上陸と同時に珍しい鼓型をしたポートタワーに興味を持ち昇ってみようと云った。私も初めてである。直ぐに賛成、一〇八米のてっぺんに昇った。

空はくっきり晴れて美しい回転展望台でジュースを飲みながら海の景色、山の景色にみとれていたが、いつまでもこうしておられない。

三階までエレベーターで、それからは歩いて下りるつもりだった。処が三階から神戸のど真ん中の空中をロープウェイが走っている。海岸通から栄町・元町通・国鉄東海道線を跨いで花隈公園にある花隈城まで空中漫歩ができるようになっている。こわいこわいという彼女を誘って乗ることにした。二十五人乗りのロープウェイはさすが満員、出発してすぐ見下ろすと、突堤の西には別府航路、淡路行きの船が小さく見える。東側には団平船というのか水上生活者の船が水面が見えない位もやっている。

ど思うと阪神高速道路、市中でありながら、自動車が水すましのようにスイスイ走っている。

元町通りの賑やかな風景、ショッピングの人達の姿を見たかったがアーケードで残念ながらお目にかかれない。

山はあくまで緑、東に大丸、西に三越百貨店の両横綱がそびえている。

空中漫歩とても楽しい。少し風が吹いてユラユラゆれる。気の小さい彼女。私の手をがっちり握ってはなさない。これも楽しさをプラスする気持よさ。女らしくなった彼女を美しくなったなあと改めて見直していると「終点花隈城でございます」とのガイドさん。

ハッとして下りた処が、昔戦国時代にあった花隈城の櫓三層目、昔の事は知らないが四百年前に建っていたものと同じお城だ。

コンクリート造りだけが変っているがお城は昔の姿そのまま。

彼女は云った「松山城を見ていると小さいね、ミニお城だわ」小さくても何でもよい、私の勤めている町の自慢の名所だ。日本国中の人が旅行の都度東海道線を通るたび、ほんとうに目の前で見えるお城なのだ。神戸のシンボルとしても辱しくないお城、僅か二年より花隈に暮していないが朝に夕に散歩して隅から隅まで知りつくしているお城、二層・一層には当時の遺品・史料がぐっすり展示されている。見て廻りながら一人前彼女に説明できるのも楽しいこと。すっかり見物も終り庭に下りた。庭は近代公園、噴水あり、滝あり、植込みあり、都心でこれぐらい緑一杯の処はないだろう。

芸術品ともいえる完成された庭のベンチにアベックで腰を下ろし郷里の話、学校の話、友達の話、今見てきた神戸上空漫歩の話、話はつきない。幼馴染、筒井筒の話になって来た。だんだんより添い肩と肩が接近し、顔と顔が向き合った……とたんに目が覚めた。

彼女の事は心配ない、夢にまでみた都心ど真中の空中漫歩のできるロープウェイ・神戸のシンボルとして花隈城の再建、これだけは自分一人どんなにきばってもできない相談。

地元の人・神戸を愛する人・篤志家の人々、多数の方々の協力を得てこの夢が正夢であるよう祈りたいのは私一人であるまいと思っている。

太平洋戦争中の花隈

堀　太三郎

私も既に八十才、太平洋戦争当時は五十二才から五十五才、取材の吉川さんからいろいろと聞かれたが、年とともに昔の記憶が薄らいで来てなかなか思い出せない。誘導尋問ではないが上手に話を引き出す吉川さんの問いに対して思い出すままに書いて貰った。

多分に間違っている処もあると思う。当時の事を知っておられる方で間違った処があると思われた時にはご勘弁を願いたい。

とにかく戦前の花隈は賑やかな明るい花街であった。検番も中検、新中検と二つあって両検番合わせて七百人ぐらいの芸妓さんがいた。

勝った勝ったの緒戦から一転して本土決戦というどたん場になった戦争とて、戦争の中期から花隈の街もだんだん変って来た。

若い男子は徴兵甲種合格どころか、兵隊にむかない丙種に至るまでどんどん戦地へ出て行き、老人・女・子供には徴用、両検番に七百人もいた芸者さん達も次から次へと和田岬にあった三菱造船所や川崎航空その他軍需工場へと駆り出されていった。老人も軍需の「雲母」めくり等に奉仕したものである。

私は当時あった相生橋警察署から花隈東部防衛部長の任命を受け町のお世話をしたのだが当時の部員で現在残っていられるのは表具店の吉川寅一さん、つるの家の田中喜代次さんぐらいではないかと思っている。

花隈はその当時東部・北部に分かれ、北部の部長は当時静タクシーを経営しておられた井奥さんだと記憶している。どんなわけ方をしたのかは知らぬが、今の中央通りの東側が東部、西側が北部といわれていた。

昭和十七年頃には現在の私の店から芳地さん、安富さんのおられるこの通りが一番賑やかであった。話の序でに自慢話の一つも入れて頂こう。今増永さんが住んでおられる処に私の店があって表に白い馬の看板を出していたので屋号の「松葉」をいう人がなく「しろうまのそばや」といわれて人気があった。南側には七福湯・豆腐屋・散髪屋・果

物屋・料亭久屋・一らくというぜんざいやと色とりどりの店があったが、戦争がひどくなるにつれ延焼を防ぐ意味で道が広げられることになり、これらの店は全部強制疎開させられたものである。

昭和十八年には現在の日野モータープール（当時空地）の広場に小学生、中学生の勤労奉仕で大きな防水池を作った。立派にできた防水池に勤労奉仕に出ていた福島少年（今の福島屋商店主）小林のアッちゃん（小林電気店主弟）が大きな石をほり込んで大人に叱られその池に投げ込まれたような記憶もある。

防空壕も始めは町内の人々が皆自分の家の床の下に作っていたが、家が焼けてむし焼になったらどうする、との事で街の空地や道路の脇に掘り始めた、町の施設として作られた大きな防空壕は先ほど述べた防水池の傍、それに現在「青葉」さんが住んでおられる処とその他二、三ヵ所あったと覚えている。

私たちの防衛の事務所は防水池の傍に石垣を築いてその中へ小さい小屋を建てて住んでいた。ある時空襲警報が出たが、なかなか敵機がこないのでいつまでも防空壕に入っている気がしないので外へ出たとたん焼夷弾の雨、びっくりして「正家」の壁に身をよせた瞬間、目の前に落ちて来たが危うく命ひろいをした。

これも十八年と記憶しているが、現在の神戸教会の軒先にB29が落とされたことがある。残骸の展示会があったが見物に来た人々が「このやろう〳〵」で残骸がそれ以上メチャメチャにこわされた。

当時花隈にも兵隊さんがいた、神戸教会には歩兵が百人ぐらいいて街の治安維持に努めておられた。たしか隊長は西峰大尉とか、隊付には終戦後自治会の会長をされていた富士井太郎さんが少尉でおられたとも記憶しているが間違いではないと思っている。

十九年から空襲はひどくなり、町内の人々は次から次へと親類縁者をたよって疎開されて行き、年末には花隈の街にはすっかり人がいなくなった。

先程も述べたように若い人は戦場へ、老人、女、子供は徴用やら疎開ですっかり人のいなくなった防衛部は、完全に部員もなくなり役員だけが二、三名残った団体になってしまった。特別役目柄というわけではないが、何としてもがんばらねばと防水池の傍の小屋で生活をしたものである。その時には私と魚善の前主人藤本寿一さん、芳地さん

の前ご主人夫妻この四人が無人の花隈に残っていただけであった。

いよいよ終戦の年の二十年、空襲はますますひどく花隈の街にも爆弾が次から次へと落とされ、街の中の建物のほとんどが全焼し全くの焼野ヶ原と化してしまった。満足に残っているといえばさすがアメリカさん、信仰のキリスト教の故か無きずの神戸教会、それに福徳寺の山門、花柳さんの土蔵、元神戸税務署の大木ぐらいのものだった。

人の災害といえば前にも言ったようにすっかり無人の街のこととてほとんど被害はなく、ただ一人だけある料亭の仲居さんが亡くなられたぐらいだった。

とにかく無人の花隈に終戦までよくがんばったと今さらながら自分なりに感心している。しかし、いつまでも小屋住いもできず、宇治川にいた娘の家へいったり小屋に戻ったりしていたものである。終戦の詔書も娘の家で聞いたように思う。

ついでに終戦直後のことを二、三書いてみよう。

面白いことに町内のお地蔵さんの祠の焼けたあとの台石に卍の印がついている。アメリカさんはドイツのマークだと言って次から次へとつぶし廻っていた。

戦後僅かな酒の配給があり、これを商売に使った。料理というか、おつまみというか、何分その材料がないので焼野ヶ原に生えてきた雑草（あかざ）をおしたしにして売ったら、あちらこちらからのお客さんで繁昌？したものであ

△空襲で焼野原と化した山手付近

大戦末期の空襲で市内の機能は全く止まった。焼失区域は市域の約60%、焼け出された人々は47万人にのぼった。

（神戸市政70周年誌より）

る。

ある日神戸新聞の記者が来たので花隈を復興しよう、花隈の人たちよ、早く花隈へ戻って来てほしいと言ったような記事を新聞に載せてほしいと頼んだのも思い出の一つ。

息子が二十一年七月南支から復員して来るまで宇治川の娘の家、花隈の小屋の往復だったが食べねばならないので高架下へすしやを出したが米がなくて困ったもの、その時分まだ闇市もできていなかった。

二十二年になってぽつぽつ疎開していた花隈の人々が帰って来た。二十三年、料亭巴（現森本）……みつや……長駒……千鳥屋と料理屋さんから復活していったように記憶している。花隈の人々の復興にかける情熱は激しく一年、二年、三年と日増しに家が建ち並び、私もお陰でその仲間入りをして二十八年現在の場所で正式な営業を開始した。それから二十年、現在のような立派な花隈の街になったのである。

（文責・吉川一雄）

画家「村上華岳先生」の思い出

村上先生は借家をたくさんお持ちでしたが店子には全くよい方でした。お茶を好まれて茶を立てると、奥様の連絡でお住居へお茶をよばれに行ったものです。奥様も播州の人でなかなかお美しく先生の描かれた「裸婦」「観音像」「美人画」も先生が初恋の人の似顔だと言っておられましたが、これはおそらく奥様のことではなかったかと思います。私も特にお心易くして頂いただけで奥様を通じ先生の作品二点を頂いておりますが、子々孫々家宝として残しつづけて行きたいと思っております。また先生の「宅趾の碑」が建てられ、毎日その前を通るたびに先生の温顔がうかんで来て懐かしさが一杯です。

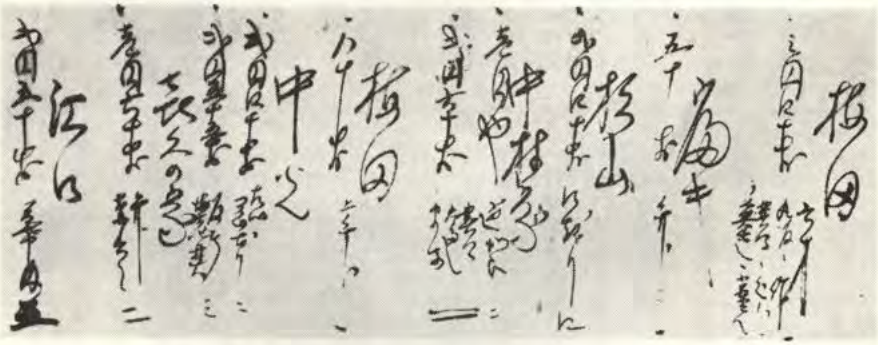
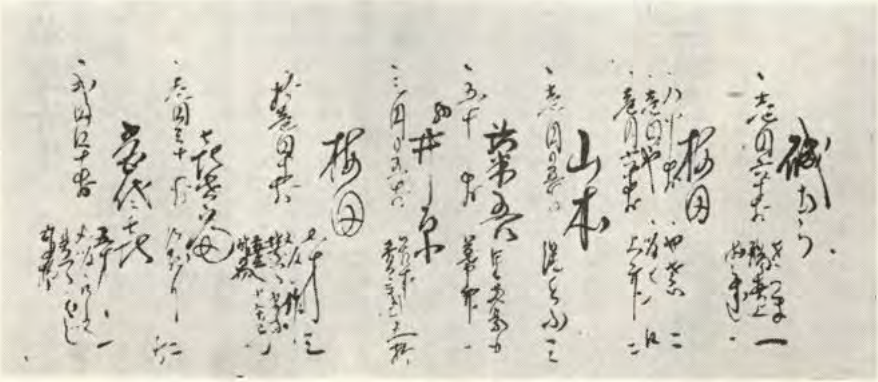
【花隈町　豊沢スミエ　談】

当時の物価

魚善　藤本啓蔵

本誌掲載前に小林通男さんの「幼い時の花隈」の原稿を読ませて頂きましたが、当時の事がこまごまと記されて懐しい思い出が一杯です。

文中梅太楼となっているのは梅田楼の誤りと思われます。

私の店に当時の大福帳（掛売帳）が残っておりますので一部をご披露いたします。

当時の料亭の名前や物価、何かの参考になれば幸甚に存じます。